

マサイ・マラ動物保護区の現状と

エコツーリズム

1992年6月

神戸俊平

ケニアのマサイ・マラ動物保護区（以下MM）では、日本人による豪華ロジが7月にもオープン予定である。有名人が名を連ね、「感情的でない環境論」をかかげるムパタ・クラブだが、現地では掲げていることとは程遠い「ずれ」を痛感させられてならない。

すでにツーリズムによる環境破壊活動はMMでも問題になっている。ムパタ・クラブが環境問題やエコロジーを心配するならば、まず多すぎるロジ、会員制クラブのあるMMから退いて、もっと野生生物に敬意を払うことが先決であろう。

MMは訪れる観光客によってすでにエコシステムが脅かされている。MM内外にはすでに十数のロジや会員制クラブがありキャンプ地を含めると常時収容できるベッド数は数千人以上ののぼる。日帰りの客も含め観光客はランドクルーザー、小型バス、バルーン（熱気球）に乗って野生生物のサファリを楽しんでいく。しかし、

1. 野生動物に過剰集中する車によって動物にストレスがたまる。子連れのチーターに72台の車が集中した例も報告されている。チーターやヒョウなどは神経質になり繁殖障害を起こしたり狩りの邪魔をされ飢えに瀕している。

2. サバンナの草地に入り込むランドクルーザーやミニバスのタイヤ跡はまるで耕運機が入ったあとのようだ。指定された道路以外の乗り入れ運転は禁止されているが守られていない。そのため飛行機で巡回検査している。

3. 早朝のバルーンサファリは、熱を気球に吹き込むためのLPGを燃す轟音が上空から野生動物

を驚かす。混んだ朝には二十基以上のバルーンが数人～十人乗りゴンドラをぶらさげて上昇していく。風まかせの着地点へ回収用トラックがオフロード走行する。利益の上がるバルーンサファリだが、そのため他の国立公園では禁止されている。

4. ロジからでるゴミ、汚水処理は深刻な問題である。ロジそばに落ちている糞や死んだ動物の胃腸内容物の調査結果では、観光客の食べ残し、コーラ壺の栓、パンティ、コンドーム等が発見されている。客が去った後、定期的にゴミあさりに来る野生動物を見るのは忍びない風景である。汚水は深い穴を掘って流し込ませ処理しているが、信頼できる浄化システムを備えた設備が必要とされる（ムパタ・ロジは崖の上に建設され各ベランダに風呂が付いているのでより注意が必要であろう）。増加する観光客のロジ密集地区ではゴミ・汚水処理の能力がさらに心配される。野生動物、人間、家畜相互間の伝染病の感染経路などはまだ不明なことばかりである。MMでは環境を守るためロジ・キャンプの建設が1987年に一時禁止された。また、ケニアでもっとも観光客が訪れるMMとアンボセリ国立公園の入場の規制が検討されている。

そこでムパタ・クラブのライアル・ワトソン氏はエコ・ツーリズムを提唱している（SPA! 5月27日号）。「観光に行く人々がその国について学び環境を変えず発展させていく」というのだ。このような考え方自体は新しいものではなく、「途上国の外貨収入路を確立する」、「観光を通してエコロジーを勉強してもらう」という視点からそれぞ



工事中のムパタ・クラブロッジ

れの状況にふさわしい方法で行なおうと、保護団体等でも調査研究されている。

ところで、どれだけの日本人がこのような考え方もってアフリカ観光に来るだろうか。ケニアに生活して私も20年になり、その間多くの日本人観光客を見てきたが、大抵エコツアーとは程遠い振る舞いである。まず、「せっかく時間を作って、金を払って来たんだから」と多額のチップを運転手、ガイドにはずみ、我先構わず動物に接近しようとする。写真を取るために車を回し「こっちむけ」とドアを叩いたり、大声をあげたり……。詳しく説明せずとも理解してもらえんと思うが。

ムパタでも教育されるだろうが、しかし、観光に来る一般日本人が、環境を変えないほどの余裕

をもってやって来るだろうか（もちろん今後を切に期待しているが）。

さらにエコツアーでは、マサイ族の伝統的な人間関係を通しての経験をするという。アフリカ生まれのワトソン氏ならともかく、言葉のわからない日本人は訪問しても、マサイ族のビーズ細工の腕輪や盾などみやげ品を買い、肩を組んで写真を撮る（みやげ品代・写真代は実際ふんだくられているにもかかわらず）のが、せめてもの伝統的生活経験なのだ。以前はロッジの使用人や運転手が勝手に中間マージンを取ってマサイ村を案内していたが、現在ナロック州（ムパタ・クラブやMMのある州）の指定でマサイ・カルチャー村が観光客用に多数オープンしている。決められた

入村費を払い、英語のわかるマサイの人に伝統的
人間関係や生活を説明してもらうのだ。おばさん
達の踊りも見せてくれる村もある。承知の上なら
構わないが観光マサイが産業化している。それで
も日本人には牛糞の家に住んでいるかわいそうな
人々とうつり、やはり悪気はなくても対等な人間
としての接点ではない。地域住民との乏しい経験
から、ワトソン氏はマサイの人々への教育制度、
自給自足できる方法（これは逆に我々が学べきこ
とと思うのだが）、環境問題への自覚をおかえし
するというのだ。サバンナの緑化運動（Hanako
5月28日号66頁）も活動のひとつというのだ。

これらはまさに南側の抱える問題であり、かつ
北側の我々のお返しが現場にとって必ずしも益と
はならなかった過去のある難しく大きな問題であ
る。そもそも人類が野生生物をどう利用するか、
その基準は今年3月京都で開かれたワシントン条
約会議でもはっきり打ち出せなかった。ムパタ・
クラブがODA並の国際的援助として取り組むな
らともかく、NGOムパタがロッジ経営の傍らに
できる様な仕事ではない。近所のロッジ・会員制
クラブでも地域に協力しているように（ムパタ・
クラブも協力しているはずだが）、学校の図書室
に本を、医療器具や医薬品を、密猟取締用に車や
ガソリン代を寄贈する程度が着実な協力と思われ
る。

環境保全・野生生物保護の分野での日本の援助
（ODA）はまだはじまったばかりであり、ケニア
側の日本への期待は充分に応えられていない。ま
して民間ロッジが、日本国内でいくら環境・エコ
ロジーを騒いでみても、ケニアでは何も知られて
いない。上部関係者には日本はまだ象牙・サイ角
の消費国としてしか認識がなく「ペランダの露天

風呂に入っている日本人を見るというアトラクシ
ョンが一つ増え、観光プロモートになるだろう」
と冗談扱いなのである。現地の地域住民ですら、
現場視察に来たマサイ曰く「ロッジができれば俺
は金持ちになる…」（週間新潮5月28日号）。まさ
に日本人のあぶく銭を絞られるだけしぼりとろうと
いう姿勢にはかならない。

今日までケニア側が努力してこなかったわけでは
ない。野生生物観光省やケニア野生生物公社
（KWS）が国立公園、動物保護区の管理維持、地
域住民への利益還元・教育、密猟対策（この20年
間にも多くの殉職者を出している。）、野生生物の
研究、計画、その他の活動をしてきた。これらの
活動には莫大な費用がかかり政府の大きな負担と
なっている。MMでも現在ECの援助による道路
補修の工事や繁殖（サイ）プロジェクト等が進行
している。このように今日まで多くの政府や
NGOが援助し、たくさんの欧米人が働いてきた。
またアフリカの元首達がタンザニアに集まり「我
々アフリカ人が自国の野生生物を自然資源として
人類を代表して守ります」と宣言し、事実これまで
多くのアフリカ人の汗と血が流れてきた。とこ
ろで、我々日本はどれだけのことをしてきたのだ
ろうか。資金も命も注ぎこんできたならともか
く、ムパタ・クラブではロッジでうまい料理を食
い、露天風呂につかりながらすばらしい景色を眺
めるのだ。コンセプトは「みんなで遊ぼう」
（Hanako 5月28日号66頁）なのである。そんな
エコ・ツーリズムからどのようなお返しがされる
のだろうか？！これまでかかわってきた人々へ
の、また同じ生き物への敬意の払い方にどこか間
違いがないだろうか。

【かんべ しゅんぺい 獣医、在ケニア】